

永井荷風

瑞

勝本清一郎

近代文学ノト

4

出た濁水のぬれといわぬ、然し山の雲の氣
みすず書房

さ一尺えぬいりて、自合は矢張まなく岸を

遠い沖合と航海してわゝと休かり思つたや。

と二万が空に、行半の水平線上に崖及形の

その朝目をさへし甲板止めて見たと、昨
の夕て瑠璃色を濃く澄みつたや、地中海の

緑色の海を二ルの大河が吐

勝本清一郎

近代文学ノート

4

解説 本多秋五

みすず書房

勝本清一郎

近代文学ノート 4

[全4冊]

本多秋五解説

1980年10月20日 印刷

1980年10月30日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 三陽社

扉・口絵・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

©1980 Misuzu Shobo

Printed in Japan

書籍コード 1391-10751-8005

落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

I

フランス自然主義と日本文学	9
ノーベル文学賞と日本作家	29
日本文学の世界文学への可能性	37
日本の文化構造と二つの世界	48
文学概念の分裂	67
おかめ・ひよつとこ・樽みこし——日本および日本人——	79
小泉信三論	94
小泉信三と新保守主義	104
日本ユネスコ運動の中心点	113
平和論議	117
ユネスコ活動法の公布を迎えて——ニワトリがアヒルのタマゴをかえた話——	122
アジア・ユネスコ会議について	125

宋磁の美が示すもの	133
-----------	-----

II

原民喜断章	137
美しい才能	141
官能小説の果て	153
時評断章	159
文芸時評	162
サルトルと丹羽	
「異邦人」の位置	
「水芭蕉」その他	
「太陽のない街」「海に生くる人々」	166
「一九二八・三・一五」の復原本文について	171
北輝次郎「国体論及び純正社会主義」	176
三十年	179
女の三重の苦しみから	183
読者第一号として	184
葛西Ⅱ石坂代作の記	188
桜の園	192

「狎の葬式」と「うろおぼえ」に就いて	194
ハーンの筆蹟	198
一字万金	208
漱石全集の思い出	210
伊狩章「硯友社の文学」——不幸な作家の研究——	214
定本「平出修集」	218
秋庭太郎「考証 永井荷風」——詩趣と反詩趣——	221
行き届いた誠実さ	225
美しい繭	228
私家版「溷東綺譚」二種	229
探偵学的文学研究について	237
近代日本文学への飛び石	240
雑誌の元祖	244
古書店への年賀状	246
蔵書の構想	251

III

蔵書帰る	256
上野図書館の前途	261
古本今昔	264
明治文学資料の今昔 (対談 八木敏夫・勝本清一郎)	267
大逆事件	293
女性解放	301
国連思想の源流	307
カフェー	310
露伴の弟子と藤村の弟子	316
大正は近い	328
古レコード	333
芸文十話	337
空海の枕本尊	
小出檜重と佐伯祐三	
地唄と地唄舞	
大正期の版画	
不受不施派	
下町での体験	
密航	
ソ連で学んだこと	
日本酒	
洋服と羽織	
ハリコフ会議のころ (対談 平野謙・勝本清一郎)	361

Ⅳ

「座談会 明治文学史」余談	405
近代画人	412
ビゴの銅版画	416
浮世絵以来の洋画趣味——嵯峨本からビゴまで——	421
北斎画の見方——北斎の十九世紀様式——	432
荷風と東京風景	439
浮世絵の明暗効果	445
解説	
勝本清一郎著作目録	
本多秋五	

I

フランス自然主義と日本文学

パリ第十四区西通 (Rue de l'Ouest) 八十番地、オテル・ド・ラ・ポスト——昔は郵便局だったかも知れない名をとどめている安宿。むろんベデカーの案内書などには出ていない裏町の五流旅館を、パリ在留の日本人画家たちが私の好みを考慮して選定して置いてくれたのだが、ここに一夜をあかしての一九三一年十一月三十日の払暁、まだ真暗なうちから窓の下に敷石道を幾台となく荷馬車が音たかく過ぎて行き、また私には珍しいフランス語の人ごえがやはり暗いなかでしきりに行き交うのに気がついて、私はいつか目をさました。意識が明瞭になると床のなかで私は咄嗟に、ああ、パリの物音だなアと、しみじみと感じた。ベルリンから来たわたしにとっては、それは——冬のパリの真暗なうちからの活発な目覚めかたは、非常に違うものであった。ベルリンでは場末でももっと静かな、キチンとした、時間通りの目覚めかたが普通だった。都市計画や労働基準法がベルリンの隅々までを支配していた。パリは押えつけても押えつけても眠り切ることを肯じない無鉄砲な、肥えすぎた生きもの

らしかった。ゾラの「ルウゴン・マツカール家」叢書のうち、「パリの腹」のはじめの野菜馬車の行列の通る夜明けの街道の光景を、私は身近に思い出した。ああ、ゾラの世界がまだそのままで生きているのだと、私はまたつづけさまに感じた。

こうしてパリにおける最初の夜明けに、私は生きているパリをゾラの作品にかく結びつけて印象したのである。「パリの腹」の冒頭では、幾台もの人参馬車やキャベツ馬車や蕪馬車や豌豆馬車が、午前二時ごろの夜道を近郊からパリ第一区の中央市場へと黙々と、しかし車輪の音を轆轤とあたりの石造建築に響かせながらつらなり動いてゆく。次第に夜があけるに従って、今度は中央市場の恐竜の骨格のような鉄骨構造のもとや、その附近の交錯した街上で、パリの巨大な「腹」(Le Ventre)の活動しはじめる光景が、ゾラの力強い筆力でいきいきと描かれてゆく。見渡すかぎり山とつまれた新鮮なキャベツやサラダやセロリや果物や花やバターやチーズや玉子や魚や鳥類や肉類や臓物類に朝の最初の陽光が射す。一面に人ごえや驢馬のなき声や金属性の騒音が湯気のように渦をまき始める……。六十年まえの中央市場をめぐるそんな景況の断片が、また私の宿屋の附近にもあるらしかった。私はあかるくなるのを待ちかねて、外へ出た。そういう朝っぱなから狭い町通りの八百屋の店頭には、歩道の上までキャベツや赤蕪の山がはみ出してつやつやとしているし、軒さきに突き出した金色の馬の首に朝日のあたっている馬肉屋の台の上には、積みおろしたばかりの赤黒い大きな片身の肉が天井までとどきそうに重ねられてあるし、パン屋には焼きたての長い棒状の狐色のフランス・パンが林のように大籠にさし込んである。冬だというのに何と豊饒でまた何と騒々しい裏町であらう。ベルリンでは

その当時でも夏冬にかかわらず食料品などは購買組合のガラス戸の奥の箱の中にキッチンと一つ一つ勘定され、整理されて這入っている程度であけひろげた店さきに往来まであふれて、朝日に照らされているなどという光景はなかった。フランスには何といっても熱帯の植民地があるからさ、とのちに説明をしてくれた画家もいた。それにしても古道具屋の店さき然たる古めかしいパリの街々は、早起きで働き好きでおしゃべり好きの小市民や労働者を一杯につめ込んで、はち切れそうに脹れあがっているのだった。ゾラが描いたパリ。裏町のパリ。十九世紀後半のパリがまだまざまざと残っていた！

島崎藤村の「平和の巴里」のなかに、ベルリンを見てきた沢木四方吉が、巴里に比べると、ベルリンはあらゆる意味において近代化（モダン）だと語る箇所がある。私もその近代的なベルリンからパリに来たので、パリの古風さに驚き、先ず何よりもゾラの世界を実感したのであった。藤村自身は同じ文章のなかで「風俗と流行の中心と言はれる斯の巴里にどうかすると私は残った中世を見つけることが出来るとさへ思ふことが御座います」という感想を残している。パリにそういうもつと古い中世のあることも確かだが、しかし私としては先ず第一に、十九世紀風の都会としてのパリを、「パリの腹」のパリを、「パリの腹」ばかりでなくゾラの全作品におけるパリを、ゾラばかりでなくフランス自然主義文学全体の土台としてのパリを、見出したわけなのである。

ところで私はフランス自然主義文学の根本的な性格の一つは、それが題材においても、また作品の中心的世界観においても、パリという都会およびその住民のなかに、パリでなくともとにかくフランスの資本主義時代の大都会とその住民のなかに根をおろしている点にあると思う。これに対して日本

の自然主義文学の基盤には、そのパリがなかった。成熟した工業的ブルジョア社会における都会がなかった。東京はだっぴろい村に過ぎなかった。その村の東京さえ、日本自然主義文学の真の立脚地ではなかった。一言でいえばフランス自然主義文学の基本的な一性格は十九世紀後半の欧州の都会文学たる点にあったが、日本の場合のそれは遅れた国の農村文学たる点、特に中小地主文学たる点にあったのだ。フランス自然主義文学の沢山の作品のなかには無論のこと、ゾラの「ルウゴン・マツカアル家」のなかにも、農村を舞台にした「大地」のような篇がある。それより「ルウゴン・マツカアル家」の第一篇たる「ルウゴン家の運命」にも明瞭に全登場人物の系譜の源があきらかに記録されてあるように、この小説中の始祖にあたる、一七六八年生れのアデライド・フウクは、南仏プロヴァンス州の田舎町ブラッサン近郊のサエン・ミイトル墓地の裏手に広い土地を持っていた中産的農家の孤兒娘であった。彼女が聲に迎えたのも、下アルプスからこの農場に臨時雇いに来ていた田舎者の作男のルウゴンである。もう一人、のちに彼女の情夫になった男も、この農場の地つづきの袋小路にあら家一つだけ残して死んだ皮靴し職工の息子という出身で、酔っぱらいの密輸入者兼密猟者のマツカアルである。つまりルウゴン家、マツカアル家の龐大な二重家族群の自然的な及び社会的な歴史は、勿論それがその年代の歴史としてきわめて当然のように、農村の一隅から始まっているのである。しかしこの農村は農村だけには終ってはいない。ゾラは都会の根を——商人や産業資本家や労働者やその他の都会人の血統の源を、示そうと試みたにとどまる。この手続きは当然である。西欧のブルジョアジイは最も典型的に正統的に、農村における中産的生産者層の中から生い育ったものである。ゾラはそ

の關係のうちで病的なグリエーションの一实例、神經的欠陥者や酒精中毒者の場合の崩れた宿命の展開をたどろうとしたのである。それはともかくとしても「ルウゴン家の運命」では、今あげた初代の三人につづく次の二代目のピエール・ルウゴンは、プラッサン町のオリイヴ油商人の娘と結婚して小市民階級に入る。やがて一八五一年十二月二日のルイ・ナポレオンのクーデターにはじまるフランス第二帝政期のお蔭で、一家は急上昇の機会をつかむ。南仏に最初の根を持った一本の蔓草が四方八方に延びひろがり、フランスを南から北まで貫き、その茎や葉の網の目のあいだに、腸詰製造販売人や羅紗屋や画家や汽車の運転手や官吏や大臣や株式仲買人や代議士や医師や売春婦や坑夫や革命家や司祭や……およそ雑多な、その大部分は工業的資本主義社会における都会的存在の諸人物を鈴生りにさせる。「ルウゴン・マッカアル家」二十巻の全構成は、クーデターからセダンの無条件降伏に至るルイ・ナポレオンのブルジョア帝政の経済組織ならびに政治組織に照応する精緻な都会的密画に外ならない。そしてまた都会的小説たる点では、様相こそ多少異なれ、フロオベルやゴンクウル兄弟やドオデやモオパッサンたちのいずれの主要作を取って見ても、やはり同様なのである。ゾラに比して文体的にもより都会的であるとさえいえる場合が多い。農村を題材にしても都会人の感覚と把握で処理している。これに反して日本では田山花袋の「重右衛門の最後」「蒲団」「生」、島崎藤村の「破戒」「家」、徳田秋聲の「足迹」「黴」「爛」、正宗白鳥の「何処へ」「大家族」「微光」「毒」「泥人形」「牛部屋の臭ひ」あたりから森田草平の「輪廻」などに至るまで、どれを取って見ても工業資本主義時代の都会小説とか、骨髄から都会人的理解による作品とかいえるような例は先ずない。一九〇六年一月か

らの刊行によって日本の自然主義運動の中心的機関としての役割を果たした、第三次「早稻田文学」や、やはり同年三月からの田山花袋編輯による「文章世界」などの全誌面がどんなに農村文学雑誌としての雰囲気を示していたかも、もとよりである。東京が舞台になつてゐる作品の場合でも、農村の中小地主階級出身の主人公たちは、まだ決して都会人化した精神的様式も習俗も示していない。彼等は商人化も産業資本家化もしていないし、また資本主義的生産様式に従属した新インテリゲンチヤのタイプも見せていない。最も都会文学たる場合が、いわゆる下宿屋文学の境地にすぎない。そしてその下宿屋の二階の一室は「大きな村」のなかの孤島である。またこの下宿屋の住人たちがそれぞれに曲りなりに結婚して各自の借家の、茶の間の主人公になつた場合の文学が、次の段階のいわゆる私小説・身辺雑記小説・心境小説なのである。しかもこれが近代日本文学史上の幹線的な系譜現象なのであるから、日本自然主義文学の基本的性格を農村文学として認識して置くことはきわめて重要であらう。

日本の自然主義文学がヨーロッパのいわゆる「本格的」自然主義文学にくらべて、思想性や政治性や世界観性において欠けるところがあり、狭い小世界的境地に偏つてゐるとは、従来も批評されて来た。私は日本の自然主義文学に思想性や政治性や社会性や世界観性が全然なかつたとは考えない。逆にうらがえした形においてのそれらはそこにあつた。それらは、表面的にも本質的にも打ちひしがれたものであつた。従つてフランス自然主義文学における打ちひしがれていないそれらとは、それは異質だったのである。別のものならあつた訳である。何故別のものをしかあらしめなかつたかは、より根底的にいつて、日本の自然主義文学が、当時社会の一方の側には成立してゐた資本主義的生産様式と、